

# 集

俳句フォーラム

2015年10月 第57号



鮫洲にて

田中藤穂

眠る人寄りかかりくる梅雨車内  
海の社緑陰の池亀泳ぐ  
浮玉を束ねて梅雨の舟溜り  
舟宿は土手のすぐ下額の花  
玄関に神棚梅雨の舟宿に

靖国神社

浦川哲子

梅雨晴れや巨大鳥居が天を突く  
神池の石橋わたる風みどり  
時空間越え零戦と出会う夏  
青葉闇同期の桜なる御霊  
英霊のみこころ知るや若楓

額の花

平野無石

大公孫樹乳房たらしめて芽吹きけり  
街騒を消しゆく青葉若葉かな  
声弾む母と子の森薄暑光  
葉桜や園児等送る昼の鐘  
額の花昔漁港の古杜

若葉風

都築繁子

若者のヨガの一団苑若葉  
黒南風や運河の土手の花談義  
梅雨晴るる遊具の下の木のチップ  
七夕や銀座テラスのミニライブ  
和楽器のユニット浴衣の粋な人

一目散

植木やす子

花冷えや親鸞像の暗き顔  
杖の先青梅の未だ小さき実  
若葉風ハンカチの木へ一目散  
立葵今日は我が背を越されけり  
十葉のさきわだつ八幡宮

惜春

大山夏子

人無くて鳴る梵鐘や花楓  
天蓋の桜あおげばことば褪せ  
食前酒おしやれに飲んで春惜しむ  
石楠の枝の撓むや重たげに  
黒南風やぶらり東京漁師町

## 新宿御苑吟行あれこれ

平野無石

五月初め新宿御苑を吟行した。御苑は俳句をやらな  
い人でも、四季折々に訪れているところではないかと  
思う。私も今までに何度か訪ねているが、訪れる時期  
や同行の人によっても、その度に印象が違うような気  
がする。

当日の吟行句を織り込みながら、あれこれ綴ってみ

る。

地図には内藤町となっているが、この由来を調べて  
みる。現在の御苑のあるところには江戸時代、信州高  
遠藩主内藤家の下屋敷があつたらしい。

御苑は面積が約十八万坪の広い敷地である。元禄時  
代主要道路整備が出されて、内藤家下屋敷の北側に新  
しい宿場が設けられることとなった。江戸四宿のうち  
東海道の品川宿、中仙道の板橋宿、日光、奥羽街道の  
千住宿はすでにあつたので、この宿は内藤新宿と呼ば  
れる。甲州街道を参勤交代で往き来する内藤家にとつ  
ても都合がよかつたのであろう。

明治になって、内藤家が高遠に引き揚げてからのこ  
とはよくわからないところがあるが、農事試験場など  
を経て、明治三十九年皇室の庭園となり、さらに昭和  
二十四年一般に公開されるようになった。

明治大正の頃造成されたと思われるフランス式庭園  
イギリス庭園が一部にあるが、これらと調和を保ちな  
がら、日本式庭園が全体の基調となっている。イギリ  
ス、フランスの文化が日本文化の心を体現した日本庭  
園に溶け込んでいる。

新宿御苑は新宿区、渋谷区にまたがる大庭園であり、

大東京のオアシスである。自然を尊び、四季の変化を愛する日本人が一年中楽しめる庭園である。

御苑の中に一步入ると、繁華街の喧騒がうそのように静かで、のどかなたたずまいがある。

街騒を消しゆく青葉若葉かな 無石

雑踏を歩み御苑の万緑へ 藤穂

このような素晴らしい庭園が交通至便な東京のど真中にあることは、われわれにとって大変ありがたいことであり、誇りを持って世界に紹介したい場所でもある。

新宿門から入り、まずは日本庭園へ。

声弾む母と子の森薄暑光 無石

亀鳴くを聞かず池面を風の跡 夏子

杖の先青梅の未だ小さき実 やす子

続いてイギリス庭園へと回る。イギリス庭園には心を解き放つような開放的な芝生の広場がある。皇室の観桜、観楓の催しもここで開かれているはずである。

広場の中ほど、御苑全体のほぼ中央あたりにユリの

木が三本ある。遠くからもよく見える大木である。カメランがチューリップツリーと教えてくれた。

この花の満開の時期に会えるのは運が良いといわれた。なるほどチューリップのような形の白い花弁と、芯の部分がオレンジ色の鮮やかな花である。

樹下に昼餉の輪を広げるグループもいれば、日本文化を楽しむ異国人のグループも多い。

ゆりの木の花やひろがる昼餉の輪 無石

百合の木の花に触れたる指の蜜 藤穂

折から幼稚園児の一団が現れ、賑やかな一幕を繰り広げた。

新緑や苑行く子等の黄の帽子 やす子

若者のヨガの一団若葉風 繁子

夏の蝶光と風を横切りて 夏子

つつじ山このひとときを憩う椅子 繁子

残念ながら楽しみをしていたハンカチの木の花は、すでに散り終っていた。

若葉風ハンカチの木へ一目散 やす子

ハンカチの木の花拾う荷風の忌 無石



食器

江口九星

雨の中紫陽花憂いもなく揺れる  
心まで洗うや夏の食器類  
支柱たて胡瓜落ち着く朝の珈琲  
はつなつの風過ぐ書斎何もなし  
木蓮は母の形見や空を指し

顔

大山夏子

陽炎や切手不足で戻り来る  
定家葛の花の垣から猫の顔  
触觉を揺らす天牛塀の上  
薔薇届く天地無用の顔をして  
明易し紫煙くゆらす亡夫の夢

托卵

関桂二

灰付けて薯植う土の黒きこと  
木の間より落つ山藤は滝となり  
托卵を知らぬ老鶯朗々と  
青田風幾重も抜けて道途中  
昨夜の雨茄子苗ぐいと丈伸びる

花菖蒲

石川賢吾

天を衝く枝もありけり糸桜  
社旗国旗浮かれてをりぬ入杜式  
緑さす白寿の枢軽からず  
月桂樹の香る花街風薫る  
助六てふ紫の濃き花菖蒲

リラの花

渡辺節子

春愁の砂漠三日月仰ぎおり  
抑留者の慟哭を聞く彼岸花  
国境を幾つ越えてもリラの花  
どくだみの花の純白常夜灯  
たっぷりと潮の香含む南紅梅

烏鷺

中川のぼる

石楠花の蕾はじける万華鏡  
手練烏鷺真意は何処に荒れる春  
スニーカー首にはタオル風薫る  
伊勢参り神話世界の散歩道  
紫蘇の香や男がいだくはかりごと

あくび

吉宇田麻衣

春昼や猫のあくびの移りけり  
新入生駆け足キラリ白き靴  
二年目の抱負を語り種を蒔く  
梅の実の青さにもらう息吹かな  
休息は密かに味わう木の芽あえ

